夢舞台に込めた思い
～南部九州インターハイ～

全国から高校生たちが鹿児島へ

7月27日(土)、「南部九州総体2019」が開幕した。

鹿児島、熊本、宮崎、沖縄、和歌山の5県を会場に開催された「南部九州総体」は、高校生のスポーツの祭典、令和元年度の全国高等学校総合体育大会(通称：インターハイ)のことだ。

昭和57年の「鹿児島総体」以来、実に37年ぶりの鹿児島での開催となった今回、鹿児島市の鹿児島アリーナでは、総合開会式が行われ、鹿児島県選手団は美しいブルーのTシャツ姿で堂々と入場した。

全国の選手団を代表して、栄誉ある選手宣誓を行ったのは、川内高校男子バスケットボール部川畑颯太郎主将(3年)、れいめい高校女子バスケットボール部徳田梨愛主将(3年)。

「一人でも多くの方に元気と笑顔を届けることができるよう、最後まで全力で競技します」

声高らかに行われた選手宣誓。2人とも自信に満ち溢れ、実に堂々としたものであった。

その後、高校生らが演劇や創作ダンスなどで開会式に華を添えた。

これから繰り広げられる30競技でどんなドラマが生まれるのか、選手たちの元気な笑顔からも期待がふくらむ。

インターハイにかける思い
仲間と流した汗と涙が
きっと君たちを強くする
思いを胸に　さあ戦おう！

高校生たちの激闘の記憶

元ライバルたちと一緒に目指したチームの勝利
川内高校男子バスケットボール部

サンアリーナせんだい、バスケットボール男子、「川内」対「北陸学院(石川)」試合開始のブザーが鳴る。チームカラーの赤色がスタンドを埋め尽くし、地響きのような大声援に「地元の応援に応える勝利を」と選手たちは心を一つに挑んだ。

序盤は、互いに守備を固め、緊迫したゲームとなった。「点の取り合いではなく、じっくりと地に足を着けたプレイを」と主将の川畑颯太郎。ロースコアで守りながら、確実に得点するスタイルが川内の持ち味だ。

この日、スターティングメンバーだった川畑と野口侑真、山田響生は、中学時代にジュニアオールスターチームで出会い、ライバルとして対戦してきた。

チームのエース野口は、高校進学時に県外の強豪校からも誘いを受けたが、「中学時代のライバルであった選手たちと、川内高校で全国を目指したい」と川畑と山田に呼び掛け、同校へ進学。高校最後のインターハイで最高の結果を目指し、練習に励んできた。

新人戦時は、県で2位だったチームが、練習と筋力トレーニングを積み重ね、インターハイ出場をつかみ取った。

両チームとも得点が決まらないまま、先制点を決めたのはエース野口。会場のムードはさらに盛り上がる。北陸学院は前日の試合で100点以上を挙げ勝利してきた強力な攻撃力を持つ。そのチームを守備でおさえ、前半は川内が6点リードで後半へ。

しかし、後半から相手が守備を切り替え、3ポイントシュートを次々と決め始めた。果敢に攻めるが、相手の守備を崩せずに逆転を許し、点差は縮まらず、序盤は健闘したものの堅守に屈し、川内はそのまま敗北した。

インターハイに出場できたのは選手たちの力だけでなく、周囲の人たちの支えも大きい。バスケットボール中心の生活をいつも支えてくれた両親、練習相手や指導をしてくれた先輩たち、優しく時に厳しく導いてくれた監督やコーチ、そして、いつも身近で応援してくれた地元の方々、多くの人々の支えがあって今、コートに立てている。

「小・中学生時代勝てなかった自分を、監督がここまで育ててくれた」

「遠くまでいつも応援に来てくれた両親。感謝の気持ちをプレイで示したい」

目指したのはチームのつないだのはキズナ
れいめい高校女子バスケットボール部

田中俊一監督は「子どもたちは、練習時間もあまり取れない中で努力し、ここまで成長してきた。心から〝ありがとう〟と言いたい。ナイスゲームだったと伝えたい」と選手たちの努力を称えた。

試合後、選手たちは涙したが、それは悔しさだけではなく、全てを出し切り満足した爽やかな涙に思えた。

キャプテンの川畑は涙を拭い「この悔しさを、次のウインターカップにぶつけたい」とつぶやいた。選手たちの気持ちはすでに次なる挑戦へと向かっていた。

学校近くの隈之城駅の清掃から、れいめい高校女子バスケットボール部の毎朝は始まる。

創部以来、初めての全国大会出場の機会が、地元鹿児島開催ということで私たちは燃えていた。

キャプテンでチームを引っ張る徳田梨愛と姉の梨恋の双子姉妹、コートに立つ選手としては、中袴田実侑を加えた3人だけが3年生という下級生が主体のチーム。

2年生エース川路悠佳を中心に、高いディフェンス力と最後まで諦めない強い意志で全国大会の切符を初めて手にした。

全国大会を戦うのは、コートに立つメンバーだけではない。

サポートに徹する3年生の平原美星。

1年生の妹森月羽を支える3年生マネージャーの羽美。膝のけがでサポートメンバーとなっている2年生の2人。

コートに立たなくても全員でれいめい高校女子バスケットボール部だ。

全員の思いが交錯する中、私たちは当日を迎えた。相手は静岡の浜松開誠館。強敵と評判ではあるが、全員の思いを一つにし、あとは精一杯やるだけだ。

試合が始まってすぐ、私たちは相手チームに先制点を許してしまった。

その後も、何とか初得点で勢いを手にしようとするも相手の高い攻撃力が私たちをしきりに襲う。

持ち味の粘り強いディフェンスで挽回しようと奮闘するが、差を縮めるどころかジリジリと離されていく。

攻撃している時間より、攻められている時間が長く、私たちの不安をあおる。

心が折れそうになった瞬間もあった。

だが、支えてくれる家族、コーチ、サポートメンバーの声援のおかげで私たちは最後まで強くいれた。声が聞こえる度にみんなの思いを背負っていることを思い出し、最後まで毅然と戦うことができた。

結果は、54対94で完敗だった。

私たちは、泣いた。声を出さずに泣いた。悔しさもあったが、もっとやれたはず。見に来てくれた方々にもう少し良いところを見せたかった。そんな思いが私たちを泣かせた。

松永真至人コーチも喉を詰まらせ、最初は声を発せなかったが、それでも声を振り絞って「全国の舞台で活躍できたことはいい経験となった。点差は離れていたかも知れないけど、最後まで応援も含めてプレイできて良かったと思う」と私たちをねぎらってくれた。

キャプテンは、ひとしきり泣いた後、「自分は、チームメイトに怒ってばかりいた気がするけど、誰一人欠けることなくこの大会を迎えられたことは良かった。下級生主体のチームで、全国の壁はきつかったけど、勝てるチームだと思うので、これからも頑張っていこう」と声を掛けてくれた。

このメンバーでやれるのも最後。初戦敗退とはなってしまったが、初めての全国大会出場は大きな自信となった。

これからも私たちは、絆をつないで未来を目指したい。私はそんな思いで前を向いた。

互いを高め合い
勇壮かつ華やかに舞う
れいめい高校体操部

新体操個人演技、れいめい高校3年の田窪莉久と森園颯大は小学校時代からお互いを高め合ってきたチームメイトだ。

会場の鹿児島アリーナ、初めに田窪の名前がコールされる。大きな歓声が上がった。演技はスティックとリングの2種類。

回転を取り入れながらスティックをキャッチすると同時に大きな歓声があがる。続いてリングの演技。スピード感あふれる曲に合わせて、リングを自由自在に操る。

「初めてのインターハイ、緊張は特にしなかった」と普段通りの演技を心掛ける。しなやかな動きの中に力強さも感じるフットワーク。高く上げられたスティックに向かい田窪が高くジャンプする。

「失敗するような練習をしてきてはいない」その言葉が演技にも表れていた。

1分30秒間の堂々たる演技。

「地元開催のインターハイに強い思いがあった。中学生の頃から目標として頑張ってきた」演技を終えると田窪はすがすがしい表情を見せた。

続いて、今年度九州高校総体チャンピオンの森園が登場。すると再び会場は大声援で沸いた。スティック演技、開始前に集中するように大きく深呼吸する。会場は静寂に包まれる。

ジュニア時代九州・全国で常に上位の実績を持つ森園であるが、高校3年まで高校総体に出場することは叶わなかった。

彼の頭の中には「優勝」の二文字しか浮かんでいなかった。

これまで積み上げてきた努力を最高のパフォーマンスに変えて、会場の声援に応えたい。地元開催そして初の総体出場に、森園の情熱は最高点に達した。

曲が始まると柔らかな動きから高いジャンプを決める。自信のある演技。

次の演技リングでも、早いテンポで見るものを魅了する。

全ての演技が終わり、総合順位が発表された。森園5位、田窪7位。2人ともに大きなミスはなかったが、細かい部分で上位との差が生まれてしまった。

今後は10月にある全日本選手権に向けた挑戦が始まる。2人はお互い新体操を通じて、切磋琢磨してきた「かけがえのない仲間」と言葉をそろえた。

次の選手権でも、今まで応援してくれた人たちに恩返しがしたい。2人の躍進はこれからも続く。

父の姿に憧れ 歩みだした柔の世界
鹿児島実業高校柔道部

柔道100kg超級の川内北中学校出身、山元隆一（3年）は、初の高校総体で粘り強く戦い、不屈不撓の精神で5位に食い込んだ。

山元は内股を得意とし、常に前に出るスタイルが持ち味。1回戦では、強敵を相手に延長戦にもつれ込むも果敢に攻め続け、勝利を引き寄せた。

剣道で学生の頃、県内トップクラスだった父の影響を受け、武道（柔道）を始め、柔道の名門である鹿実の門をたたいた。

体を鍛えて強くなれること、そして何より柔道から元気をもらえることがうれしくて、12年間続けてきた。

「柔道が生活の一部（リズム）になっている」と少年のように語り、初の総体が地元開催で緊張したか問うと「かえってやりやすかった」と動じていなかった。

優勝には届かなかったが、最後まで一歩も引かなかった姿は、見ている人の心にしっかりと残る。

「今後も練習に励みながら、さらにレベルアップして、今回以上の結果を残したい」と屈託のない笑顔を見せてくれた。

美しいローイングで 水上を滑るように進む
川内商工高校ボート部

ボート競技女子シングルスカル、川内商工高校3年の石原玲奈。彼女が競技を始めたのは、高校生になってから。3年間を振り返ってこう語った。

「自分一人では、ここまで続けて来られなかった。支えてくれた全ての人に感謝している。遠方の大会まで応援に来てくれた家族にも」

大会最後のレース、上位入賞への重圧からスタートで出遅れた。得意のスパートで追い上げたが、あと一歩及ばず総合7位。悔し涙がこみ上げてくる。

しかし、ここで立ち止まる彼女ではない。大会翌日には気持ちを切り替え、10月に開催される茨城国体での雪辱を誓った。

「次こそは日本一を取りたい」

決勝に届かなかった同校の男子団体・女子団体のクォドルプル（かじ手付き4人制）チームと共に、日本の頂点を目指す。

仲間との 出会いに感謝

卓球女子シングルス、川内高校3年の中本朱音。カットマンスタイルでゆったりと打ち返すリズムから、時折り鋭いスマッシュを織り交ぜ、果敢に戦った。スコアは、交互に得点し合う展開も初戦突破は成らなかった。

試合後のインタビュー、明るく話してくれた彼女の目に涙が浮かぶ。

今まで一緒に戦ってきた、仲間との思い出が、心に込み上げてきたのだろうか。仲間に感謝し、競技に全力を尽くした美しい涙だった。

川薩清修館高校の陸上・ホッケー・ウエイトリフティング、れいめい高校の卓球・体操・柔道、川内高校の陸上の選手たちも、さまざな思いを胸に高校生最大のスポーツの祭典に挑んだ。

感動は無限大 南部九州から世界へ そして未来へ

熱い戦いが繰り広げられた令和元年度の南部九州インターハイが閉幕した。

このインターハイを最後に大好きだった、全てだった競技から退く者、舞台を変え、大学生や社会人として挑戦を続けさらなる高みを目指す者と、それぞれの未来への道を歩み出す。この大会の経験が今後の人生や競技に生かされ、新たな感動へとつながる原動力になる。

これまで苦しいこともあっただろう。諦めそうになったときもあっただろう。

それでも歯を食いしばってここまでやってきた。

地元鹿児島の地で、みんなの期待を背に、君たちは確かに大きく羽ばたいた。

今はゆっくりと体を休め、
仲間と青春を謳歌するといい。
高校生たちよ
感動をありがとう！

薩摩川内市 名誉市民に 田中憲夫氏

8月26日(月)、川内文化ホールで名誉市民称号記贈呈式が行われ、元川内商工会議所会頭の田中憲夫氏に称号記と名誉市民章が贈られました。

名誉市民は、公共の福祉の増進、産業文化の進展または社会公益上に偉大な貢献をなし、その功績が顕著である本市住民または本市に縁故の深い方に、市議会の同意を得て、その称号を贈るものです。

田中憲夫氏は、川内青年会議所の初代理事長を務められた後、平成5年7月に川内商工会議所会頭に就任され、かごしま川内貿易振興協会会長および川内大綱引保存会会長などの多くの要職を歴任。産業経済の発展に加え、重要港湾川内港の振興、中国常熟市および韓国昌寧郡との友好交流の促進、川内大綱引の保存継承に尽力されるなど、市勢発展に大きく貢献されました。

名誉市民第3号 田中憲夫氏の功績概要

昭和47年2月
- 川内青年会議所理事長

平成5年7月
- 川内商工会議所会頭
- かごしま川内貿易振興協会会長
- 川内大綱引保存会会長

平成17年4月
- 薩摩川内市国際交流協会会長

田中憲夫氏
(元川内商工会議所会頭)
昭和12年生まれ(82歳)

力を合わせて熱中症高齢者を救う! お手柄3人に表彰状

熱中症で倒れた高齢男性を救助したとして、中央消防署は、7月17日(水)、川内南中学校3年生の長井甲之介さん、濵田青希さん、瀬戸山慎助さんの3人に表彰状を贈りました。

3人は、6月13日(木)の下校途中に畑で倒れている男性を発見。「大丈夫ですか」と呼び掛けたが反応が鈍く、熱中症を疑い、すぐさま応急処置を開始しました。タオルで汗を拭ったり、氷水を入れた袋を両脇に当てて体を冷やしたりして、男性に声を掛け続けました。救急隊が到着した際には、状況説明など適切な引き継ぎを行い、男性は病院に運ばれ、命に別状はありませんでした。

3人は、昨年救命講習会を受講し、AEDの使用方法や、傷病者に対する応急処置などを学んでいました。表彰式で、鶴屋豊文中央消防署長は「人命救助に携わる者として大変うれしく心強く思う」と功績をたたえました。

▲写真左より、長井甲之介さん、濵田青希さん、瀬戸山慎助さん

当時の感想を聞いたところ、将来看護師を目指す長井さんは「1人じゃ何もできなかったけど、友達がいてくれたから落ち着けた。自分も熱中症で倒れた経験があり、そのときにしてもらったことを覚えていたので対応できた」、濵田さんは「倒れている人を見つけたときは怖かった。この経験を生かして、1人でも同じように対応できるようにしたい」、瀬戸山さんは謙遜しながら「怖かったし、あんまり何もできなかった。2人がいてくれたおかげ」と話してくれました。

令和元年 9月16日(月) 祝 敬老の日

これからも お元気で

9月の第3月曜日は、国民の祝日の一つである「敬老の日」です。
多年にわたり、社会のために尽力してこられた高齢者を敬い、その長寿を祝う日です。
先日、厚生労働省が発表した平成30年の平均寿命は、女性は87.32歳で世界第2位、男性は81.25歳で世界第3位でした。

問合先／本庁高齢・介護福祉課高齢者福祉グループ (内線2673)

江口 マツヨ (108歳)
【里】薗中

口癖は、「おかげさま」で、感謝の気持ちを忘れずに毎日、歌を歌ったりして楽しく過ごしています。

柊 シナヲ (108歳)
【川内】上大迫

最近は入退院の繰り返しですが、食欲はあり、一日一日を大切に過ごしています。

濵田 ミチ (107歳)
【川内】草道上

食事もおかわりをするほど元気で、車椅子でお好きな所へ自由気ままです。

上野 榮惠 (107歳)
【川内】上代

朝目覚めて、床で10分間の体操の後、一日の計画を立てます。なるべく人の手を借りずに自立する努力をしています。

中村 サダ子 (107歳)
【樋脇】樋掛

来客を喜び、一人で30分以上も話しています。食事は不規則ですが三食一時間以上かけて食べます。

一〇六歳
高崎 ヒデ子【樋脇】
前園 トミ【川内】上杉馬場
一〇五歳
南 八重【下甑】
竹山 ケイ【川内】峰下
重永 妙子【入来】堂向
北山 スエ【樋脇】和光園
福重 フサ【川内】小路(清色)
岩下 テルエ【樋脇】指月苑
一〇四歳
福元 タエ子【川内】上手(永利)
小西 アキ【川内】和光園
鈴木 ヨシノ【川内】上川内駅通り
湯丸 ミキ【祁答院】滝聞
川畑 ツルエ【樋脇】翠泉苑
米丸 ミナ【川内】戸田
小牧 サカ【川内】鶴峯
山下 スミエ【川内】都
高崎 アカシ【祁答院】滝聞
高江 ヒサ【祁答院】川西
一〇三歳
的場 タミエ【祁答院】
加治屋 松江【川内】南
宮野 ソエカ【川内】矢立
東 ヒメ子【上甑】大明神
川原 ナツエ【川内】上甑町江石
瀧聞 田平 レイ【祁答院】妹背
十重【祁答院】滝聞
吉永 イクモ【下甑】のぞみ園
一〇二歳
中園 カツノ【樋脇】麓
羽月 都米【川内】倉野上
中村 エイ【上甑】平城
福冨 ソメ【川内】平良
汐満 キイ【川内】薗畑
澁谷 チミ【祁答院】幸せの里
村田 留市【川内】浦
古川 満雄【川内】八幡馬場
桐野 スミ子【樋脇】宮崎
勝田 スマ【入来】三島
西田 イクエ【川内】折宇都
坂元 ツキ【東郷】とうごう苑
中村 イト【川内】碇山
内田 チカ【川内】本城
椋 貞子【川内】東手
原 スミ子【川内】原之馬場
下今別府 アツ【入来】新町
弟子丸 ツル子【川内】寄待
西村 綾子【川内】寄待
坂元 芳枝【東郷】山田上
有滿 マツエ【川内】宮崎原
橋口 ヨシエ【里】村西
一〇一歳
石走 ノブ【川内】原之馬場
宮野 チトサ【下甑】甑島敬老園
墓 秋惠【川内】下台
石原 ミサエ【入来】博愛園
後藤 トキエ【川内】和光園
中野 アヤ子【東郷】舟倉
寺脇 シヅエ【川内】天辰馬場
宮園 幸子【川内】瀬口
山口 ヨネ【川内】別府
田平 操【川内】大坪
川畑 ヒデ【川内】前向(寄田)
別府 タツミ【樋脇】指月苑
石原 フサエ【川内】今寺
上床 俊盛【川内】砂岳(湯田)
山門 幸己【東郷】鳥丸西
宮里 タカ【東郷】とうごう苑
徳田 マツ子【川内】鶴峯
西薗 ケサ【里】薗中
土屋 花子【川内】仁合院
石原 源作【上甑】こしき園
森 モヨ【樋脇】指月苑
小山田 トミ【樋脇】翠泉苑
下薗 實美【川内】湯之元
迫田 久子【下甑】浜
一〇〇歳
シヅエ【川内】原之馬場
久保園 高城 トキエ【祁答院】のぞみ園
田中 キリ【川内】役田
原田 静枝【里】村西
里平 ミエ【入来】村尾
三堂 ハツエ【川内】三堂
鶴屋 國男【川内】和光園
上田 クサエ【樋脇】翠泉苑
今西 ケイ【入来】博愛園
外嶌 金五郎【川内】山田島
市坪 健三【入来】向山
下今別府 胖【入来】新町
伊東 トミ子【入来】まち
杉安 ハツエ【川内】木場谷
下町 妙子【川内】白滝
前畠 佐津子【樋脇】城之下
平島 シヅ【川内】平島
馬場 フミ子【川内】嘉之城(川原田)
西原 静乃【川内】嘉之城(城之下西)
大園 洋子【入来】山下
小牟田 ツル子【川内】尾賀
小原 ミチ【川内】特養永利
松田 利秋【下甑】麓
野間口 ツル子【川内】上別府一
奥平 ツナエ【東郷】とうごう苑
野下 ヨシ【川内】砂岳(湯田)
中村 サヨ【川内】橋口
西谷 正春【川内】矢立
福重 ミサヨ【川内】一条殿
米積 ミツノ【祁答院】砂石
角 ハル【里】薗下
湯田 ユキ【川内】星原
山口 ヒサエ【入来】大内田
高野 充子【樋脇】本町
市来 キリ【東郷】とうごう苑
上村 イノ【上甑】中甑
南 オリエ【下甑】本町
永田 ハル子【里】薗上
山口 と ぎ【川内】開聞東
枝元 フヂノ【祁答院】中原
北園 サツノ【川内】長野(平佐東)
土器手 トミ【川内】原田口中央
川床 ミチエ【祁答院】のぞみ園
山下 ヨシ子【樋脇】指月苑
上加世田 ニシエ【樋脇】小野
大石 スエ子【川内】寄待

＊同意をいただいた方を掲載しています。(敬称略)　＊年齢は9月1日を基準とし、令和元年8月23日現在、生年月日順で掲載しています。

10月から「幼児教育・保育の無償化」始まります

対象施設・サービスなど	対象者	
	３～５歳児（全ての世帯）	０～２歳児（市民税非課税世帯）
○幼稚園　○認定こども園　○保育所 ○地域型保育事業所（小規模保育・事業所内保育など） ○障害児の発達支援（障害児通園施設） ＊幼稚園と保育園との併用含む ○企業主導型保育事業所	○保育料を無償化 注1 ○保育所の食材料費などは全て10月から実費徴収となります。 注2	○保育料を無償化 ・実費徴収代はこれまでと変更ありません。 ・障害児の発達支援についてはすでに無料となっています。
○１号認定（幼稚園・認定こども園の教育部分）の預かり保育	「保育の必要性の認定」を受けた場合	
	○月額11,300円（1日当たり450円）を上限に利用料を無償化 注3	—
○その他の保育サービス ・認可外保育施設 ・病児保育事業 ・一時預かり事業 ・ファミリー・サポート・センター事業（預りのみ）	「保育の必要性の認定」を受けた場合 ＊その他の保育サービス内での複数のサービス利用可	
	○月額37,000円を上限に利用料を無償化	○月額42,000円を上限に利用料を無償化

注1　１号認定（幼稚園・認定こども園の教育部分）の子どもは満３歳から無償化
２号認定（保育園・認定こども園の保育部分）の子どもは満３歳になった後の４月から無償化

注2　食材料費、通園送迎費、行事費などは実費徴収
ただし、低所得者および同時通園児内での第３子以降の子どもについては副食（おかず・おやつなど）の費用が免除されます。

注3　満３歳となった子どもで、最初の３月31日を迎えるまでの間は、市民税非課税世帯に限り、月額16,300円を上限に無償化

＊ご不明な点は問い合わせください。　**問合先**／本庁子育て支援課保育グループ（内線２３５３・２３６３）

知っておきたい認知症のこと

高齢化に伴い、全国的に認知症の方が増え、2025年には、65歳以上の高齢者のうち、5人に1人が認知症になると推計しています。

認知症は、「老化による物忘れ」とは違います。

認知症は、何らかの病気によって脳の神経細胞が壊れるために起こる症状や状態をいい、進行するとだんだんと理解する能力や判断する力がなくなって、社会生活や日常生活に支障が出てくるようになります。

認知症は誰でもなり得る病気です。

認知症の症状は、適切な治療や関わり方で改善したり、進行を遅らせたりできることもあります。家族や地域住民などの周りの方々が、認知症に関する正しい知識と理解を深めることが大切です。認知症かな？と思ったら、まずは、かかりつけ医に相談してみましょう。

本市では、認知症の本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で自分らしく生活することができる社会を目指し、次のようなさまざまな取り組みを展開しています。

詳しくは、電話などでお気軽に問い合わせください。

認知症サポーター養成講座

認知症への理解を深めるための普及・啓発を目的として、地域や企業、小・中学校などで実施しています。

認知症カフェ・家族介護者交流会

認知症の人やその家族を支える地域づくりを促進し、誰もが気軽に集い、交流できる場として、市内10カ所で実施しています。また、介護者が中心に活動する交流会「よいやんせ」もあります。

認知症相談会

認知症に関する相談窓口として、専門知識を持つ、「認知症地域支援推進員」による個別相談会です。日程は、広報紙で随時お知らせしています。

認知症ケアパス

認知症と疑われる症状が発生した時から、進行していくそれぞれの過程において、その人の状況に応じたサービスの流れを示したケアパスを作成し、配布しています。

介護予防教室（ミニデイサービス）

高齢者の健康づくりの場として、65歳以上の方を対象に、運動を中心とした認知症予防、口腔（こうくう）、栄養などの内容を含んだ介護予防教室を実施しています。

認知症初期集中支援チームによるサポート

認知症の専門医、専門知識を持つ保健師や社会福祉士などがチームで支援する活動を行っています。

認知症徘徊（はいかい）高齢者等SOSネットワーク事業

徘徊の恐れのある高齢者を事前に登録して、日頃から見守りを行うとともに、徘徊発生時には地域包括支援センターを中心に、関係機関が連携して早期発見・保護に努める事業です。

あなたの大事な家族のことまずは、ご相談ください。

9月15日～21日は、「認知症を理解し一緒に歩む県民週間」です。

県では、認知症の正しい理解のさらなる普及・啓発などを目的に、世界アルツハイマーデーである9月21日を含む1週間を県民週間としています。

相談・問合先
▼本庁高齢・介護福祉課介護給付グループ（内線2675・2676）
▼市地域包括支援センター（市総合福祉会館内）☎(24)3331